



# スポーツ 見本 文化論

編集 高橋徹

# The cultural theory of sports

# 見本

## 著者一覧

### 編者

たかはしとおる  
高橋徹／岡山大学

### 執筆者（掲載順）

高橋徹（前出）	第1章
<small>やまわき</small> 山脇あゆみ／金沢学院大学	第2章
<small>は た こしかつあき</small> 波多腰克晃／日本体育大学	第3章
<small>せ とくにひろ</small> 瀬戸邦弘／鳥取大学	第4章
<small>き どうゆう や</small> 佐藤雄哉／国土舘大学	第5章
<small>あらまき あい</small> 荒牧亜衣／武蔵大学	第6章
<small>なかざわゆう ひ</small> 中澤雄飛／帝京大学	第7章
<small>ゆきざねてつべい</small> 行實鉄平／久留米大学	第8章
<small>おおかつし づ ほ</small> 大勝志津穂／愛知東邦大学	第9章
<small>うち だみつる</small> 内田満／九州共立大学	第10章
<small>やまもとたつぞう</small> 山本達三／びわこ成蹊スポーツ大学	第11章
<small>おおはしみつり</small> 大橋充典／久留米大学	第12章
<small>ちんけいこう</small> 陳慶光／長崎国際大学	第13章

はじめに

# 見本

スポーツは世界中の誰もが親しめる文化として、私たちの日々の生活の傍らに存在している。本書を手にとったみなさんの中にも、毎日のようにスポーツを目にし、スポーツで汗を流している人も多くいると思う。しかし、みなさんはスポーツについてどれだけのことを知っているだろうか？ スポーツはなぜ世界中の人々が親しむことのできる文化として受け入れられているのだろうか？ もちろん、このような問いに向き合うことがなくともスポーツは魅力的であり、常に私たちを惹きつけてくれる。しかし、スポーツについて今まで以上に詳しく知ることができたなら、その魅力や面白さは何倍にも膨らむに違いない。

今の時代、私たちは日本にいながらにして世界中のスポーツを目にすることができ、世界中の人々もまた日本で行われているスポーツに注目することもできる。そして、部活動やサークル活動、休日のレクリエーションなどを通して多くのスポーツを実際に体験することもできる。また一方では、スポーツがまちづくりやコミュニティ形成、あるいは健康増進方策や地域経済活性化など、多様な分野へと波及的に貢献できる可能性についても注目が集まるようになってきている。このようにスポーツは今なお現在進行形で発展し続けている文化なのである。

文化の発展の背後には、その文化を支えている人々の存在がある。スポーツについて考えれば、さまざまな形でスポーツに携わっている読者のみなさんがその文化の担い手ということになる。そして、みなさんのような文化の担い手によって、スポーツはこれからもより一層豊かな文化として発展を遂げていくはずである。みなさんが本書をきっかけにしてさらに深くスポーツについて知りたいと思い、学びを進めることで、将来のスポーツ文化の発展に寄与する力を育むことにつながれば幸いである。

最後になるが、本書の作成にあたっては多くの執筆者のご協力を頂いた。出版に至るまで多忙な中で執筆を進めて頂いた先生方には心より感謝申し上げます。また、本書の出版を打診していただき、企画立案から共に作成を進めてきた株式会社みらいのみなさまにも感謝したい。多くのおみなさまとともに本書を書き上げることができたことを大変光栄に思う。この場をお借りして厚く御礼を申し上げたい。

2022年2月

編著者 高橋徹

はじめに

## 第1章 スポーツ文化の発展

<b>1</b>	<b>スポーツとは何か</b> .....	11
1	スポーツという言葉が持つ3つの意味.....	11
2	スポーツという言葉の語源的解釈と近代的解釈.....	12
3	近代的解釈としてのスポーツの特徴.....	13
4	スポーツの定義.....	15
<b>2</b>	<b>文化とは何か</b> .....	16
1	文化の概念.....	16
2	スポーツ分野からみた文化の定義.....	17
3	文化の伝播.....	19
<b>3</b>	<b>スポーツ文化との多様なかかわり</b> .....	20
1	スポーツ文化との多様なかかわり方.....	20
2	スポーツによる異文化理解と文化共生.....	21
3	スポーツ文化の継承と発展.....	22
<b>column</b>	スポーツの美しさを観てみよう.....	25

## 第2章 スポーツの誕生

<b>1</b>	<b>スポーツの起源</b> .....	27
1	先史時代の生活.....	27
2	先史時代のスポーツ.....	27
<b>2</b>	<b>古代ギリシアのスポーツ</b> .....	28
1	古代ギリシアの競技精神（美にして善＝カロカガティア）.....	28
2	古代オリンピック.....	28
3	競技種目と参加資格.....	30
4	ヘライア祭.....	31
5	エケケイリア（聖なる休戦）.....	31
<b>3</b>	<b>古代ローマのスポーツ</b> .....	32
1	ローマ市民とスポーツの関係.....	32
2	キルクス（競技場）やコロッセウム（闘技場）で行われたスポーツ.....	33

<b>4</b>	<b>中世ヨーロッパのスポーツ</b> .....	34
1	騎士のスポーツ.....	34
2	市民のスポーツ.....	35
3	聖職者のスポーツ.....	35
	<b>column</b> 盛大で華やかな古代オリンピックの裏側.....	37

### 第3章 近代スポーツの世界への広がり

<b>1</b>	<b>パブリック・スクールでのスポーツの奨励</b> .....	39
1	ジェントルマンの育成.....	39
2	アスレティズムと教育の結びつき.....	40
<b>2</b>	<b>イギリスにおけるスポーツの組織化</b> .....	41
1	パブリックスクールでのルールの制定.....	41
2	スクール対抗戦.....	42
3	国内ルール.....	42
4	競技団体の設立—フットボールからサッカー・ラグビーへ—.....	43
<b>3</b>	<b>近代スポーツの伝播と抵抗</b> .....	44
1	ドイツにおけるトゥルネン.....	44
2	トゥルネンの抵抗.....	45
3	ドイツ文化とイギリス文化の折衷論.....	46
<b>4</b>	<b>アメリカにおけるスポーツの発展</b> .....	47
1	メンバー・チェンジの思想.....	47
2	カレッジスポーツの熱狂.....	48
3	人種差別とスポーツの歴史.....	49
4	3大スポーツの歴史.....	50
	<b>column</b> コッホ先生と僕らの革命.....	53

### 第4章 日本におけるスポーツの受容とその後の文化形成

<b>1</b>	<b>近代日本文化としてのスポーツの誕生</b> .....	55
1	近代日本へのスポーツの移入と翻訳的適応.....	55
2	伝統に培われたクラブ観と日本文化としてのスポーツ.....	56
<b>2</b>	<b>社会とともに歩む伝統スポーツ</b> .....	59
1	メディアが育んだ日本のスポーツ文化.....	59
2	国際スポーツを頂点としないスポーツ文化.....	60

<b>3 国際スポーツとインテグリティ</b> .....	62
1 国際スポーツ空間に求められるインテグリティ .....	62
2 ユートピアをめざし、ディストピア化が懸念されるスポーツ空間 .....	63
<b>column</b> スポーツ人類学とはどんな学問か .....	66

## 第5章 武道とスポーツ

<b>1 武道はスポーツか</b> .....	69
1 武道とスポーツ .....	69
2 柔道とJudo .....	69
<b>2 武道と教育</b> .....	71
1 武術の近代化 .....	71
2 武道のイデオロギー化とスポーツ化 .....	71
<b>3 武道の現在と未来</b> .....	73
1 世界のBudo .....	73
2 新たな武道(Budo)の創造 .....	74
<b>column</b> 武道はスポーツか否か .....	77

## 第6章 オリンピックとスポーツ

<b>1 近代オリンピックの誕生</b> .....	79
1 近代オリンピックの創始者ピエール・ド・クーベルタン .....	79
2 近代オリンピックの復興 .....	80
<b>2 オリンピズムとオリンピック・ムーブメント</b> .....	82
1 オリンピック憲章における国際オリンピック委員会の役割 .....	82
2 オリンピズムの根本原則 .....	83
3 オリンピック・シンボルとその役割 .....	84
<b>3 オリンピック競技大会の歴史の変遷</b> .....	85
1 戦争により中止された大会 .....	85
2 オリンピック競技大会の政治利用 .....	86
3 オリンピック競技大会の肥大化 .....	87
<b>4 オリンピック競技大会の招致とレガシー</b> .....	89
1 オリンピック競技大会招致の仕組み .....	89
2 国際オリンピック委員会が重視するレガシー .....	90
<b>column</b> 女性とオリンピック .....	94

## 第7章 身体とスポーツ

1	身体というからだの見方	97
1	さまざまな身体観の紹介	97
2	身体論の紹介	98
2	身体文化とスポーツ	100
1	身体文化の定義	100
2	身体文化とスポーツの関係	101
3	科学技術の発達とスポーツ選手の身体	102
1	用具の発達による身体能力の拡張	102
2	ドーピングと身体	103
column	「身体」が教えてくれる人間の面白さ	106

## 第8章 アダプテッド・スポーツ

1	アダプテッド・スポーツとは何か	109
1	アダプテッド・スポーツの概念	109
2	アダプテッド・スポーツの可能性	110
2	障害者を取り巻くスポーツ環境	112
1	障害者スポーツの推進	112
2	障害者スポーツの環境整備	113
3	パラリンピックの誕生と理念	114
1	パラリンピックの歴史	114
2	パラリンピックの理念	115
4	障害者に拓かれたスポーツ環境の構築	116
1	アスリートを支えるスポーツ環境	116
2	身近な地域におけるスポーツ環境	117
column	スポーツという「不利益」文化について考えてみた	120

## 第9章 ジェンダーとスポーツ

1	ジェンダーとは何か	123
1	ジェンダーの概念と変遷	123
2	ジェンダーにかかわる用語	124
3	近代スポーツの発展とジェンダー	125

<b>2</b>	<b>ジェンダーが形成される要因</b> .....	126
1	社会.....	126
2	学校教育.....	127
3	部活動.....	128
<b>3</b>	<b>なぜ、スポーツの世界でジェンダーが問題となるのか</b> .....	130
1	スポーツにおける平等の問題.....	130
2	スポーツにおける公正の問題.....	130
3	スポーツにおける男性中心主義.....	131
4	スポーツ組織の構造.....	131
<b>4</b>	<b>スポーツにおけるジェンダー平等に向けて</b> .....	132
1	スポーツ関連組織の取り組み.....	132
2	指導者の取り組み.....	133
3	人々の意識改革.....	133
<b>column</b>	<b>スポーツとジェンダーが直面する社会的課題</b> .....	136

## 第 10 章 生涯スポーツ社会の実現

<b>1</b>	<b>生涯スポーツの俯瞰</b> .....	139
1	日本における生涯スポーツ政策成立までの流れ.....	139
2	生涯スポーツの考え方.....	141
<b>2</b>	<b>生涯スポーツにかかわる政策—スポーツ基本法—</b> .....	142
1	スポーツ振興法とスポーツ振興基本計画.....	142
2	スポーツ基本法とスポーツ基本計画.....	143
<b>3</b>	<b>総合型地域スポーツクラブ</b> .....	144
1	総合型地域スポーツクラブとは.....	144
2	総合型地域スポーツクラブのマネジメント.....	145
3	総合型地域スポーツクラブの実際.....	146
<b>column</b>	<b>私の履歴書：スポーツを仕事に</b> .....	149

## 第 11 章 経済とスポーツ

<b>1</b>	<b>スポーツのもつ経済効果</b> .....	151
1	スポーツの商品化と経済効果.....	151
2	日本におけるスポーツ関連産業の動向.....	152
<b>2</b>	<b>スポーツ市場の動向</b> .....	154
1	スポーツ市場とスポーツ需要の特性.....	154
2	するスポーツ市場の動向.....	155
3	みるスポーツ市場の動向.....	157



<b>3</b>	<b>スポーツ・スポンサーシップ</b> .....	159
1	スポーツプロダクトを用いたブランドイメージ・ロイヤルティの向上.....	159
2	トップアスリートとのエンドースメント契約.....	160
<b>column</b>	自転車ブーム再来.....	163

## 第12章 メディアとスポーツ

<b>1</b>	<b>メディアとスポーツの依存関係</b> .....	165
1	メディアの発展とスポーツの現在.....	165
2	スポーツ報道の初期.....	166
3	新聞社主催のスポーツイベントと系列関係.....	166
4	ラジオ放送の登場と政治利用.....	168
5	テレビ放映と先端技術.....	169
<b>2</b>	<b>スポーツを利用したメディアの戦略</b> .....	169
1	スポーツを放映する仕組み.....	169
2	放映権料の高騰がもたらす影響.....	171
3	メディアに描かれるスポーツのストーリー.....	174
4	先端技術とスポーツのこれから.....	175
<b>column</b>	メディアの読み解きとスポーツ.....	179

## 第13章 スポーツツーリズム

<b>1</b>	<b>スポーツツーリズムとは何か</b> .....	181
1	スポーツツーリズムの背景.....	181
2	スポーツツーリズムの定義と種類.....	183
<b>2</b>	<b>国家戦略としてのスポーツツーリズム</b> .....	184
1	スポーツツーリズムの推進.....	184
2	訪日外国人向けコンテンツとしてのスポーツ.....	185
3	スポーツツーリズムによる地方創生.....	187
<b>3</b>	<b>スポーツツーリズムの現状と将来</b> .....	188
1	スポーツツーリズムの事例.....	188
2	スポーツツーリズムの課題と将来.....	190
<b>column</b>	コロナ渦でも立ち止まらない！ マラソン×地域活性化.....	193

学びの確認 解答.....	194
さくいん.....	197

スポーツ文化の発展  
見本

なぜこの章を学ぶのですか？

スポーツ文化は私たちにとって身近な存在ですが、何気なく使っている「スポーツ」や「文化」という言葉について、その意味を正確に説明できる人は少ないのではないのでしょうか。私たち一人一人がスポーツ文化を支える存在だからこそ、まずはその言葉の意味や成り立ちを理解しておくことが重要です。



第1章の学びのポイントは何ですか？

この章では「スポーツ」と「文化」、それぞれの言葉の成り立ちやその言葉の意味について紹介しています。この2つの言葉は、これ以降の章の中でも多々用いられていますので、まずはその言葉を正確に理解しましょう。その上で、文化としてのスポーツの特徴についても理解を深めるようにしましょう。



## 考えてみよう

1

文化という言葉聞いてスポーツ以外に思いつくものをいくつか挙げてみて、それらとスポーツとの違いを考えてみましょう。

2

これまでにあなたはスポーツとどのようにかかわってきましたか？ 思い出してみましょう。

# 1 スポーツとは何か

# 見本

「スポーツ」という言葉は、使用される場面によってもさまざまな意味内容で用いられているが、その定義を大きく分類すると、語源的解釈と近代的解釈に分けることができる。今現在、私たちが使用する「スポーツ」という言葉は近代的解釈によるものが多く、それは遊戯性、組織性、競争性、身体性の4つの構成要素を備えた活動として定義できる。

## 1 スポーツという言葉がもつ3つの意味

「スポーツ」という言葉は日頃からよく耳にするにもかかわらず、私たちが改めてスポーツとは何かを考える機会は少ないかもしれない。スポーツ文化についての議論を始めるにあたり、本節ではまず、スポーツとはそもそも何かを考えてみたい。

スポーツに関する用語を整理した『最新スポーツ科学事典』によれば、一般的にスポーツという言葉は大きく分けて3つの意味で使用されているといわれる<sup>1)</sup>。1つ目は、スポーツという言葉がルールに基づいて身体的能力を競い合う遊びを組織化、制度化したものの総称であるという意味である。これはスポーツの定義として後述するように、遊戯性、競争性、組織性、身体性という4つの要素から説明されるスポーツの概念的な捉え方といえる。

2つ目は、**健康の保持増進や爽快感などを求めて行われる身体活動**のことを指してスポーツと呼ぶ場合である。例えば、ウォーキングやジョギングなどのように、スポーツの定義上では明確な概念分類が困難であっても、身体活動全般ではスポーツと呼ばれることがある。

3つ目は、**知的な戦略能力を競い合う遊び**を指してスポーツと呼ぶ場合である。例えば、チェスや将棋を頭脳のスポーツと呼ぶことがあるように、歴史的に見ると産業革命以前のイギリスではチェスもスポーツの一つとして捉えられており、現在でもそのような認識は一部で残っている。ただし、このスポーツの捉え方は、現代においては特殊な使われ方であるため一般的ではない。

このようにスポーツという言葉は、その言葉を使用する際の状況や使用者本人の認識によっても意味内容が異なる場合がある。したがって、一義的に定義することが難しく、論者ごとにさまざまな解釈が存在しているというのが実情である。しかし、そのような課題を含みつつも、スポーツを明確に定義しようという試みがこれまでに数多くの研究者によって取り組まれてき

た。まずは、スポーツという言葉がどのような経緯で生まれたのか、その語源を見てみたい。

## 2 スポーツという言葉の語源的解釈と近代的解釈

### (1) スポーツという言葉の語源

「スポーツ」という言葉が日本において一般的に使われるようになったのは大正時代以降といわれている<sup>2)</sup>。明治時代の初め、すでにベースボールやフットボールなどの欧米生まれのスポーツ種目は日本に移入されていたが、それらは当初、「スポーツ」と呼ばれることはなく「遊戯」あるいは「運動」の名で呼ばれていた。その後、大正時代に入ると、英語の「sport」をカタカナ読みした「スポーツ」「スポート」「スポオツ」などのカタカナ表記が使われ始め、次第に「スポーツ」という言葉が普及していったのである<sup>3)</sup>。

一方で、「sport」という英単語にもその語源が存在する。「sport」の語源については諸説あることを前置きした上で、一般的には古代ローマ時代のラテン語「deportare」（運ぶ、運び去る）に由来するとされている。その原義である「運ぶ、運び去る」は、「ある状態から他の状態への転換」をも意味し、ここから「気分転換をする」あるいは「気晴らしをする」という意味に変化を遂げたのである。その後、「deportare」は古代フランス語の「deporter」「desporter」に引き継がれ、古代フランス語から中世英語の「deport」「dessport」へと伝えられた後、「sport」という言葉が使われるようになったのである<sup>4)</sup>。

### (2) マッキントッシュによるスポーツの語源的解釈

スポーツの語源からスポーツの定義を規定しようとした人物がイギリスのスポーツ研究者マッキントッシュ (P. C. McIntosh) である。マッキントッシュはスポーツが多くて人間の生活に影響を与えていることから、それを定義づけることは困難であると釈明しつつも、言葉の語源に立ち返ることでスポーツを解釈することを試みている。

フランス語の語源では、人生の悲しいあるいは深刻な面からのどのような気分転換をもスポーツと呼んでいる。それは山に登ることから恋をすることまでの、また自動車競走から悪ふざけをすることまでの活動を一切網羅している。名詞としてのスポーツという語は、男、女、ゲーム、気晴らし、狩猟 (chase および hunt)、闘争、冗談、あるいはまた植物の変種す

# 見本

ら指している<sup>5)</sup>。

マッキントッシュにならない、スポーツを語源から解釈するならば、それは仕事などの真面目なことを忘れ、日常を離れて何かに没頭する中で、気晴らしをすることや遊び戯れることを意味していると理解することができる<sup>6)</sup>。

しかし、今現在、スポーツという言葉聞いて気晴らしや遊び戯れることまでもイメージするだろうか？ おそらく多くの人にとって、そうした活動はスポーツとは異なる活動として認識するのが一般的であるだろう。つまり、**スポーツという言葉は時代とともにその捉え方が変化してきており、そしてこれからも変化する可能性を有している**のである。

### (3) スポーツという言葉の近代的解釈

時代とともに言葉のもつ意味が変化するというスポーツの特徴を踏まえて、現在のスポーツの捉え方と語源的な意味でのスポーツの捉え方は区別して考えることが望ましいとする議論がある。それは、スポーツという言葉の意味をその語源にまで立ち返って考察することと、競争的な身体的活動の側面が強調された現在のスポーツについて考察することとを区別すべきという主張であり、前者は**スポーツの語源的解釈**、後者は**スポーツの近代的解釈**と呼ばれている<sup>7)</sup>。

つまり、語源的解釈に従えば、人間の活動の極めて広い範囲までもスポーツとして捉えることができる一方で、それとは反対に近代的解釈に従えば、オリンピック競技大会などで行われる競技種目としてのみスポーツを捉えることもできるのである。この語源的解釈と近代的解釈という考え方は、スポーツという言葉の意味を理解する上でとても重要な観点である。

## 3 近代的解釈としてのスポーツの特徴

### (1) ジレによるスポーツの定義

近代的解釈としてのスポーツの定義としては、フランスのスポーツ研究者である**ジレ (B. Gillet)** が示した定義が著名である。この定義は数多く存在するスポーツの定義の中でも最も基本的な考え方の一つである。

一つの運動をスポーツとして認めるために、われわれは三つの要素、即ち、**遊戯、闘争、およびはげしい肉体活動**を要求する<sup>8)</sup>。

つまりジレは、スポーツが本来的にもつ気晴らしや遊びなどの遊戯の性格と併せて、「闘争」と「はげしい肉体活動」を追加したのである。なお、この「闘争」は対戦相手との闘いだけでなく、時間や距離、自然環境、自分自身との闘いをも意味している。そして、スポーツでは「はげしい肉体活動」が求められるために、他の遊戯的活動からは区別されるというのがジレの主張である。

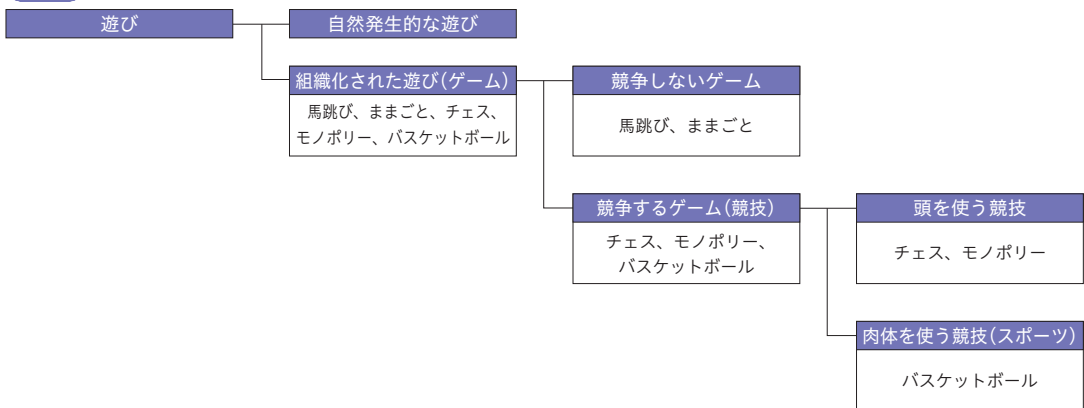
さて、「遊戯」「闘争」「はげしい肉体活動」という3つの要素から説明されるジレの定義には一つの問題点がある。それは、スポーツの中には「はげしい肉体活動」を伴わない種目も存在しているという点である。例えば、アーチェリーでは的を目標けて矢を射る際に、日常生活での水準以上に心拍数を整え、身体の微細な動きをも制御することが求められるため、それは「はげしい肉体活動」とは正反対の活動となる。このように、ジレの考えにならえば多くのスポーツを定義づけることができるものの、全てのスポーツを定義づけるまでには至らないという問題点もある。

## (2) グットマンが示した近代スポーツの特徴

アメリカのスポーツ史研究者であるグットマン(A. Guttmann)<sup>\*1</sup>は、マッキントッシュやジレとは異なる独自の観点からスポーツを考察し、その特徴を明らかにしている。グットマンが着目したのは、スポーツを定義づける際に最も重要な要素とされる遊びである。彼は「遊び」「ゲーム」「競技」「スポーツ」という4つの要素の関係性を明確に規定することを通して、スポーツの特徴を示している<sup>9)</sup>。

\*1 文献により、「グットマン」の表記の場合もある。

図 1-1 スポーツの特徴



出典：A. グットマン（清水哲男訳）『スポーツと現代アメリカ』TBS プリタニカ 1981年 p.19より著者作成

グットマンは遊びを非実用的でそれ自身のために追及される肉体的、精神的な活動であると規定した上で、遊びを「①自然発生的な遊び」と「②組織

## 見本

化された遊び（ゲーム）」とに分ける。そして、「②組織化された遊び（ゲーム）」を「③競争しないゲーム」と「④競争するゲーム（競技）」とに分けた上で、「④競争するゲーム（競技）」はさらに、「⑤頭を使う競技」と「⑥肉体を使う競技（スポーツ）」とに分けられるとしている。

グットマンによれば、「②ゲーム」には、馬跳び、ままごと、チェス、モノポリー\*2、バスケットボールなどが含まれるとされる。そして、そのうちの④「競技」に当たるのが、チェス、モノポリー、バスケットボールであり、さらにその3つのうち、⑥の「スポーツ」に該当するのがバスケットボールなのである。

グットマンの考察をまとめるならば、スポーツは**肉体を用いながら競争する組織化された遊び**という特徴をもっていることになる。このスポーツの特徴は、語源的解釈によって捉えられるようなスポーツとは異なり、まさに近代以降のスポーツの特徴を端的に捉えたものである。

\*2 モノポリー  
20世紀初頭にアメリカで生まれたボードゲームの一つ。盤上に描かれた会社や不動産を売買するゲーム。

## 4 スポーツの定義

ここまではマッキントッシュ、ジレ、グットマンという、スポーツの意味を考える上での代表的な3名の議論を紹介してきた。ここでは、彼らの議論を踏まえた形で提示された2つのスポーツの定義を見てみたい。

まず樋口聡によれば、スポーツは日常とは異なる意味連関をもつ特殊な状況の中で（遊戯性）、人為的な規則に基づき（組織性）、他人との競争や自然との対決を含んだ（競争性）、身体的活動（身体性）であると定義される<sup>10)</sup>。

次に近藤良享は、スポーツの定義には多くの諸説があるとしながらも、遊戯性、組織性、競争性、身体性の4つの構成要素を備えた活動がスポーツであると述べている<sup>11)</sup>。

これらの定義によれば、スポーツの4つの構成要素のうちの**遊戯性**とは、スポーツが日常生活とは異なる非日常の時間、空間の中で行われる活動ということの意味している。**組織性**とは、制度性とも表現できるものであり、スポーツが成立するためにはルールのもろ確性や絶対性によって支えられなければならないことを意味している。3つ目の**競争性**は、スポーツでは必然的に競い合いが生じることを意味している。なお、この競争には人と人、チームとチーム、人やチームと自然といった競争の形も含まれる。最後の**身体性**とは、スポーツには身体的に熟練することや卓越した技能を身につけるという性質が伴っていることを意味している。それは、スポーツを語源的に解釈し

た際にその範疇に含まれてくるチェスやトランプと近代スポーツとを区別するための基準でもある。

この遊戯性、組織性、競争性、身体性というスポーツの4つの構成要素は、スポーツと他の活動領域との区別を鮮明にする上での観点にもなる。つまり、あらゆる人間の活動の中でも、この4つの要素を備えた活動こそがスポーツとして認められる活動なのである。

本節のここまでの議論をまとめるならば、今現在、私たちがスポーツという言葉聞いてイメージするのは近代的解釈によるスポーツであり、それは遊戯性、組織性、競争性、身体性の4つの構成要素を備えた活動とすることができる。それは語源的解釈によるスポーツの姿とは区別されるものなのである。

## 2 文化とは何か

文化という言葉の意味を考える際には、タイラーによる定義が参照されることが多い。その定義を見ると、スポーツも文化の一つとして理解することができるが、スポーツを文化として理解する考え方は比較的新しいものである。文化は国や民族などの社会集団の間で伝播する中で、ローカル性とグローバル性という2つの性質をもちながら発展を遂げてきている。

### 1 文化の概念

「文化」もまたスポーツと同様に世の中にあふれている言葉であるにもかかわらず、その言葉の意味を深く考えた経験は少ないかもしれない。スポーツ文化を考えるために、本節ではスポーツに続き、文化とはそもそも何かを考えてみたい。しかし、ここで文化について考える上で大きな課題となるのが、文化という言葉もまた各分野において広狭さまざまに解釈されているという問題である。そのような文化という言葉の詳細な定義を試みる上で伝統的に参照されてきたのが、イギリスの文化人類学者であるタイラー (E. B. Tylor) が示した定義である。次の一文は文化を考える上で最も著名な定義の一つとされている。

知識・信仰・芸術・法律・習俗・その他、社会の一員としての人の得る能力と習慣とを含む複雑な全体である<sup>12)</sup>。



# 見本

タイラーが示したこの定義は文化についての基本的な考え方として広く認識されているが、彼がこの定義を発表したのは1873（明治6）年のことである。19世紀当時には交通網や電信技術の発達により、世界規模での経済活動が本格的に拡大し、タイラーの住むイギリスはその中心地の一つであった。当時、経済活動を通して世界がつながったことにより、各地の人々の生活や価値観、風習などが実に多様性に満ちたものであることが一般的にも知れ渡り、文化の違いに対する関心も高まったとされる。タイラーが文化を定義した背景には、世界各地での交流が盛んになり、自らの文化と他の文化との違いを意識せざるを得なくなった当時の社会状況が反映されていると考えることができる。

次に、日本語として使われている文化という言葉の意味を辞書から引いてみよう。

人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ科学・技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容とを含む<sup>13)</sup>。

その人間集団の構成員に共通の価値観を反映した、物心両面にわたる活動の様式（の総体）。また、それによって創り出されたもの<sup>14)</sup>。

この辞書的な定義は、タイラーの定義を内包しているものとして読み解くこともできるし、また反対にタイラーの定義が辞書の定義をも内包していると読むこともできる。いずれにしても**文化という言葉には、人間の日常的な行為や、人為的に作り上げてきたあらゆる物や制度が内包されている**ことが分かる。そして、文化には**ある社会集団の中で共有されている価値観**が反映されているのである。例えば、日本語という言葉は日本という社会集団の中で共有されている文化であるし、その他にも年賀状やお中元、お歳暮を贈り合うという風習なども集団内での文化であり、お辞儀などの日常的な所作もまた文化として理解することができるのである。

## 2 スポーツ分野から見た文化の定義

### (1) スポーツと文化の区別

ここまでで紹介した文化の概念を見ると、文化とは非常に広範な意味をもつ言葉であり、スポーツもまた文化の一つとして理解することができる。

ところが、日本においてはスポーツが芸術などの他の文化活動と区別されて認識される場合がある。その一例として、学校での部活動における運動部と文化部の区別が挙げられる。学校での部活動やクラブ活動は大別して、スポーツ関係の組織が運動部と呼ばれる一方で、音楽や美術などに関連する組織は総称して文化部と呼ばれるという慣習がある。この場合の文化とは、音楽、絵画、演劇などの諸活動を文化活動として捉えているのである。このような例は他でも見ることができ、例えば文部科学省内でもスポーツ庁と文化庁とが別組織として存在しているように、日本においてはスポーツと他の文化活動とを区別して認識するような風潮が見られるのである。

この理由の一つとして、他の文化活動が知的で上品な感性的な営みとして捉えられるのに対して、スポーツはある種粗暴で暴力的な反知性的な営みとして捉えられていることを指摘する議論もある<sup>15)</sup>。運動部と文化部という区別はその状況を端的に表現している事象と考えることもできるのである。

## (2) 文化としてのスポーツ

わが国でスポーツを文化として把握しようとする取り組みは、1980年代以降になってようやく本格化したといわれている<sup>16)</sup>。つまり、スポーツを言語、学問、宗教、芸術、制度、生活様式などと同じく人為的所産であり、文化の一形態として認識することは、実のところ比較的新しい考え方なのである。

スポーツを文化の一つとして把握する議論のきっかけには、1975（昭和50）年に開催された欧州スポーツ関係閣僚会議において採択された「ヨーロッパみんなのスポーツ憲章」がある<sup>17)</sup>。ここでは、スポーツに内在する価値（ルール、戦術・技術、マナーなど）が、人間にとって豊かで充実した生活を営むのに不可欠な教育上意義のある文化的な特性であることが承認されたのである。

他方、日本においてこれと同時期の1970（昭和45）年に発行された『体育科学事典』には、スポーツと文化との関係が次のように述べられている。

広く人間の行動様式のすべてを含むものであり、したがって、科学、芸術、宗教ばかりでなく、慣習、制度、娯楽までも含む広い概念であり、この広義の解釈からすれば、スポーツもまさに人の作り出した文化そのものであり、それは、各民族、国家で独特のものを作り上げていると同時に、国際交流によって、他民族、他国のスポーツがそれぞれの国に紹介、導入されて、その国の文化に融合している<sup>18)</sup>。

# 見本

この一文からは文化の意味を広義に捉えることによって、そこにスポーツも含まれることが主張されている。

現在ではスポーツを文化の一つとして認識することに特段の違和感を覚えることはないかもしれないが、私たちがそのような認識をもつことのできる背景には、ここで紹介したようなスポーツを文化の一つとして捉えようとしてきた概念整理の努力があったのである。

## 3 文化の伝播

### (1) 文化のグローバル性とローカル性

先に紹介した文化の概念を見ても分かるように、文化とは元来、国や地域、民族といった社会集団ごとに独自のものであり、それはそれぞれの社会集団の中で過去から現在へと継承されてきたものである。しかし、現代社会のように世界中をつなぐ交通網が発展し、**情報通信技術（以下「ICT」）**を通じたネットワークが張りめぐらされた世界の中では、もはや文化とは特定の社会集団内だけで完結するものではなく、他の社会集団へと伝播していくものとなっている。そして、他の社会集団からの新たな文化を受け入れることによって、自らがもつ既存の文化との融合や対立が生じ、それがまた新たな文化を生み出すという状況が生まれている。

したがって、文化というのは**自らの国や地域の独自性というローカルな性質**を有すると同時に、それが**他の国や地域との交流へとつながるという意味でグローバルな性質**も有するものとなっている。そして、このような文化のもつ性質をスポーツは象徴しているのである。

### (2) スポーツ文化の伝播

さまざまな種目があるスポーツであるが、一つ一つの種目がそれぞれの国や地域、民族の文化を象徴する一面をもつと同時に、世界との交流へと開かれた一面ももっている。例えば、日本において人気のスポーツである野球は、明治時代に伝来したアメリカ生まれのスポーツであり、それが日本の文化と融合することで現在の野球界の盛況へとつながっている。もともとはアメリカの一部地域でのみ行われていたローカルなゲームにすぎなかったものが、後にアメリカ全土へと伝播し、今やアメリカ人の男らしさ、集団アイデンティティ、コミュニティの探求のための理想的な背景とも考えられるほどになっているのである<sup>19)</sup>。そして、日本はもちろんのこと、東アジアや北中米の国や地域を中心に広がり、世界中で多くの愛好者を生むほどになっている。

もちろん日本から海外へと伝播したスポーツもある。例えば、柔道は日本独自の精神性を内包しつつ、日本から世界へと伝播することで各地に愛好者を生み、Judo の呼び名でスポーツとして親しまれている。嘉納治五郎<sup>\*3</sup>によって生み出された日本のローカルな文化であった柔道は、日本国内にとどまらず世界へと広がり、今やブラジル、フランスの競技人口は日本を上回るほどになっている。そこでは日本の文化的特性と各地の文化とが融合し、新たなスポーツ文化として生み出された Judo が受け入れられているのである。

このように文化とは、人と人、民族と民族、国と国などをつなぎながら、少しずつ変化を遂げつつも継承され発展していく性質をもっているのである。

\*3  
嘉納治五郎 (1860-1938) の功績については第 5 章を参照のこと。

### 3 スポーツ文化との多様なかかわり

スポーツとのかかわり方は「する」「みる」「ささえる」「しる (しらべる)」という4つの視点から捉えられる。そのようにスポーツには多様な形でかかわることができ、スポーツを通して異文化と自文化の双方への理解を深め、文化共生を実現することもできる。私たちはスポーツ文化を楽しみつつも、スポーツへの知見を深め、スポーツ文化の発展と継承という役割も担っている。

#### 1 スポーツ文化との多様なかかわり方

「スポーツ」という言葉は、今や世界中のどこでも誰にでも伝わる共通語として使用されている。スポーツ文化がこれほどまでに世界中に広がり、親しまれている背景には、その文化とのかかわり方の多様さが挙げられる。スポーツへのかかわり方は、スポーツを「する」ことだけに限ったものではなく、スポーツを「みる」こと、スポーツを「ささえる」こと、そしてスポーツを「しる (しらべる)」こともまた、重要なかかわり方である。

例えば、スポーツを「みる」という場合、私たちはスタジアムに直接足を運び試合を観戦することもできるし、テレビやインターネットなどのさまざまなメディアを通して目にもすることもできる。特にメディアを通してのスポーツ観戦は、1964 (昭和 39) 年に開催された東京オリンピックにて衛星生中継によるテレビ放送が開始されて以降、ICT の発達とともに加速度的にそのバリエーションを増やしてきたといわれている<sup>20)</sup>。

次にスポーツを「ささえる」というかかわり方については、スポーツイベ